



海援隊旗(二隻の旗)

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/

謹賀 KINGASHINNEN 新年



もっと龍馬を知ろう!!

現代龍馬学会 目指すところ

来年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」が、また龍馬に“火”を付けた。あちこちで「りょうま、りょうま」の声が聞かれる。龍馬を知り、理解するいい機会である。現代龍馬学会にとっては願ってもないこと。理事と事務局員の新年思いのコメントです。

龍馬は多くのの人々に愛される。それが高ければ高いほど創作や空想も数多く闊歩する。龍馬の実像を史料に基づいて明確にとらえ、その動きを歴史の流れの中で位置づける。そこから現代に生きる龍馬の思想を追わねばならない。現代龍馬学会の成果を期待したい。



歴史民俗資料館 館長 宅間 一之

Mジャンセン先生に言われて気が付いた。通常、未来に向かう歴史研究といながら、偉人の“過去話”の自伝を基礎とする。しかし、龍馬には、自伝がない。時流を知り「エヘン」への手紙と龍馬を育てた風土・文化の歴史的事実研究を目指した。



歴史研究家 現代龍馬学会 会長 永国 淳哉

坂崎紫潮が小説「汗血千里駒」を書いたのは、坂本龍馬を自由民権運動の先駆者と見たからでしょう。以来百二十年余り、龍馬は時代ごとにさまざまに語られてきました。私たちのこの学会も、現代における新しい龍馬像を創り出すことができればと願うものです。



高知新聞編集委員 片岡 雅文

現代の龍馬人気は小説やテレビドラマの影響が大きいと思われませんが、一方でしっかりと史料により真実を解き明かし、龍馬が果たした歴史的役割を考えたい。ますます重要性を増しています。現代龍馬学会が楽しく意義深い学会に発展することを祈ります。



徳島大学名誉教授 渋谷 雅之

博物館法に定められた博物館業務の大きな柱は、資料の収集・保管・展示・教育普及・調査研究が挙げられる。この中で、館の大きな課題となっていたのは、調査研究である。この学会で研究したことを基に、龍馬の業績を正しく顕彰し、志を伝えていきたい。



坂本龍馬記念館 学芸員 三浦 夏樹

混沌殺伐とした世の中。幕末土佐人の互助精神と、自ら未来を変えようとする土佐人スピリッツは、現代人に最も必要とされる力です。現代龍馬学会が、より多くの識者の交流と討論の場となり、大人のための全く新しい「現代の寺子屋」となることを願っています。



エッセイスト 渡辺 瑠海

館長就任三年で、人後に落ちぬ龍馬ファンになった。特に勉強したからというのではない。入館者の皆さんの龍馬に寄せた、熱風が巻き込まれたのだ。死してなおこの人気。人間の魅力の原点を見せつけられた思いである。しかも快い。その“熱”を伝えたい。



坂本龍馬記念館 館長 森 健志郎

龍馬という人は巨象と同じで、切り口次第で様々な顔を見せます。龍馬、人々、時代、政治、経済、風俗。現代龍馬学会から龍馬を介した知的な面白さを発信していきたいものです。この学会の場づくりは、県立坂本龍馬記念館の使命のひとつでもあるからです。



坂本龍馬記念館 学芸主任 前田 由紀枝



“龍馬の見た海”水平線を眺めながら「美しいですね。実は海から龍馬記念館を見たことがありますよ」と思い出深げであった。

高円宮妃殿下お成り

皇族として初めての見学

10月23日朝、あいにくの天気がお車が桂浜にかかるころ青空となった。高円宮久子様は明るい黄色のスーツ姿で興味深く企画展をのぞきながら「美しいですね。実は海から龍馬記念館を見たことがありますよ」と思い出深げであった。

『海援隊約規物語』展

後期開催中
海援隊魂とは(ひたすら、熱く)

二月二十三日(日)まで



民地化を避けるべく海軍の充実を図りながら世界へ漕ぎだそうとした龍馬の考えと行動の基盤にあったのは海援隊です。

慶応三年(一八六七)四月、亀山社中から再出発した海援隊は、土佐藩から正式に任命された隊長・龍馬に全ての権限が委ねられました。つまり、明文化された海援隊の規則「海援隊約規」には、龍馬の理想と志が簡潔に表わされています。

十二月末から始まった「海援隊約規物語」展・後期「海援隊魂とは(ひたすら、熱く)」では、そうした龍馬の考え方や行動にスポットを当てています。

幕末当時、日本国内では四百ともいわれる草莽の志士たちによる集団・部隊が組織され、尊王攘夷、あるいは佐幕のために活動していました。海援隊もそのひとつです。

しかし、「海援隊約規」を見ると、わずか二十数名の隊士からなる海援隊は他の組織と違った目的を持っていたことが分かります。多くが討

「僕は役人は嫌だ。そうさな、世界の海援隊でもやりましようか」。龍馬はそう言ったというエピソードがあります。

大政奉還後すぐ、「新官制議定書」を考えた際、新政府のメンバーの中に龍馬の名前がないのを尋ねた西郷に対してです。作り話だともいわれますが、龍馬らしい逸話です。

世界の海援隊という言葉に集約されるように、日本という国を考え、真の日本人になりたいと望んだ龍馬の視線の先には「世界」がありました。海運業を興して世界へ渡り、世界と対等につきあう。日本の植

□「海援隊約規物語」

歴史探訪バスツアー
2月8日(日)／定員35人
前期で紹介した龍馬の家族・子孫たちを訪ねて、県東部・安田町を中心に、田野町、奈半利町などを巡ります。高松順蔵・千鶴墓所、お龍・君枝像、海援隊士関係各所
(問合せ・申込は記念館まで)

展示資料
海援隊約規(弘松家寄託)
龍馬書簡(当館所蔵)
公文菊徳・肖像画(坂本龍馬、勝海舟、武市半平太、桂小五郎、山内容堂、吉村虎太郎、中岡慎太郎、坂本家所蔵)
西郷隆盛書(坂本家所蔵)
武市半平太書簡(初公開、弘松家寄託)
龍馬像原型(本山家所蔵)ほか

前田 由紀枝

命がけ仕事の中の風流 「龍馬の歌と花」展開催



新年スタートの企画展「龍馬の歌と花」は、館の新しい試みです。

歴史研究家で、館の運営協議委員でもある永国淳哉氏と「装道礼法着物学院」の皆さんの合作企画展の形をとりました。二階フロアに七体の龍馬が歌と花とともに登場します。とにかく、「分か

りやすく」を心がけました。

親しみやすい新たな龍馬像が浮かんでくるでしょう。

テーマとなる花は梅、桜、藤、菊、萩、桔梗、紅葉の七種類です。和歌に歌いこんだものだけではありません。例えば桔梗。これは家紋です。流行り歌もあります。これは龍馬の作詞というのではなく、龍馬が口ずさんだものだろうと、それは想像したり…。

さて和歌は果たして上手だったのか? 「上手い」という声も



装道礼法 着物学院 高知県支部の徳能美代さんが担当

あります。新年の館内は華やかになるでしょう。

永国さんは「私の感じている龍馬を表現しました。歌の上手、下手はあるでしょうが、命がけの仕事に奔走している最中のことです。その状態を想像してください。何だか龍馬が身近な感じになりますか」と話している。

森 健志郎



長男・一郎(早世) 白雲(立姿) 長女・志可子 母・曾恵 妻・金 次男・近思(私の父)

私の祖父、本山白雲(本名・辰吉)は高知県宿毛市に二八七年明治(四)に生まれ、私が九歳になった二九五年(昭和二七)、八十二歳で亡くなりました。

白雲は子どもの頃から絵や人形を作るのが好きで彫刻の勉強をしたかったようですが、当時の本山家に勉強させる余裕はありませんでした。代用教員をして生活を助けてい

「祖父・白雲の思い出と龍馬像」 本山 和道



現在、館の見逃せない一点に、本山白雲作、桂浜龍馬像の木製原型がある。本山家からお借りしたものである。高さ1メートルにも足らぬものだが、威風堂々それでいてなんとも優しい表情が、観覧者の足を止める。白雲のお孫さんに思い出を語ってもらった。思い出秘話である。

た白雲は、十七歳のときどうして彫刻の勉強がしたいという気持ちで母曾恵に相談します。「自分の長所はどこまでも伸ばしなさい」という曾恵に後押しされ、行李二つを持って、宿毛から歩いて上京することになりました。我が祖父ながら、その志の高さと意志の強さに頭が下がる気持ちがあります。

彫刻家・高村光雲(詩人高村光太郎の父)の弟子となり東京美術学校で学んだ白雲は、上野公園の西郷隆盛像制作では光雲の助手を務めました。彫刻家として認められ、明治の元勳の銅像も多く作りましたが、太平洋戦争でほとんどが供出されました。現存する銅像は、龍馬像をはじめ国会議事堂の板垣退助らごくわずかなものしかありません。父の話では、空襲が続く戦争末期の昭和十九年暮れ、祖父は供出された像の原型を二つずつ素手で叩き割り土に埋めていったそうです。淡々とした様子、毅然とした態度であったというのですが、さぞかし無念であったのだろうと思います。

祖父は制作を始めるとアトリエにこもり誰も入れることはありませんでした。私は中をそっと覗いたことがあります。白いつ

張りを着た大柄な祖父が腕組みをして立ち尽くし、人を寄せ付けない気迫に満ちていたことを忘れることができます。それでも祖父が外出した後のアトリエで、たくさん並んだ大きな石膏像や偉人たちの像の間でかくれんぼしたことは、怖さと楽しさが入り混じった愉快な思い出です。

厳格な祖父でしたが、私が朝早く庭掃除をしたときなど、こやかに笑って褒めてくれました。戦時中に生まれた私に、「平和な世の中をすくすく歩むように」という意味で「和道」と名づけてくれたのも祖父です。

龍馬像は今年八十年を迎えました。建設に奔走した入交好保さんたちの思いを汲んで、祖父は精魂込めて仕事に没頭したはず。曾祖母の曾恵は、宿毛に嫁ぐ前に近所にいた龍馬と将棋をさしたといわれます。龍馬より四歳下の曾恵は、祖父の傍で龍馬像の制作をじっと見守っていたということ。大勢の思いが結集してできた桂浜の龍馬像。その原型を我が家から初めて出して公開しました。龍馬とともに、祖父・白雲の志と優しさを感じ取っていただければ幸いです。

「装道」心“を帯に結ぶ 展覧会を終えて

社団法人 全日本きものコンサルタント協会高知支部 支部長
装道礼法きもの学院高知県認可連盟 運営委員長

徳能 美代



あけまして おめでとうございます。
昨年四月二十日、桂浜の「龍宮祭」に地元会員の紹介により、ゆかたの上で半幅帯でお花を結ぶ着装に協力させていただきました。珍しい結び方に祭りの主催者や、観光客の方たちにも大変喜んでいただくことができました。

私たち、装道礼法きもの学院は日本の伝統文化である「きもの」を単に着付けるのではなく、しつけをつける、衿を正す等「きもの」からでた言葉がありますように、「きもの」に込められています。優しさを思いやりの（愛の心）内面の美しさ（真の美の心）尊敬する（礼の心）自然や周りの人との（順和の心）そんな“心”を通して自らの人格を高め、真の美しい生き方をする。この理念のもとに日々精進しているところです。

心のすさんだ悲しいニュースが多い毎日です。それだけに私たちの思いは次の世代に繋いでいきたいと、小、中学生に「装道装束法法こども教室」も

開催しております。そんな背景があった十月十五日から十一月十六日の一ヶ月間、龍馬記念館で「秋の帯結び展」開催の運びとなりました。
帯で表現したのは「高知城」「はり



会場のそこそこに帯の花が咲いた

まや橋」をはじめ、名所旧跡、県花（ヤマモモ）市花（土佐ミズキ）など33体でした。行楽シーズンでもあり、沢山の方々に見ていただけた良かったです。一本の帯で結んであるのが不思議なようで、下からのぞいたり、花びらをひっくり返したり、つまんでみたりと、とても関心を持って見ていただきました。龍馬に会いに来られた方々には、なんでもこんな展示が？と違和感を持たれた方もおいでだったでしょう。一方、龍馬をはじめ非業の死を遂げられた幕末の志士たちの間に、「花があってもいいね」と言ってくれた方もおられました。このような場所での展示、展覧会は私どもにとって初めての経験でした。初めてのチャレンジに会員一同、ワクワク、ドキドキ、しかし楽しい一ヶ月でした。また、一月一日より三月二十日まで開催の「龍馬の歌と花」展でもまた龍馬と「共演」です。精一杯、龍馬の気持ちに花に結ばせていただきます。



龍馬紙芝居

「龍馬はともだち」開始!

坂本龍馬“って名前聞いたことあるけど、どんな人なのか？高知の子どもたちに少しでも坂本龍馬のことを知ってもらうため、当館では、高知県下の小学校二五〇校すべてを順次訪問し、龍馬の紙芝居を読ませてもらっています。



この紙芝居には、「薩長同盟」「船中八策」などの言葉は出てきません。タイトルにもあるように、テーマは「ともだちを大切にすること」。

龍馬が新しい日本をつくるのができたのは、誰でも仲良くなれる性格と、多くの人の意見を聞き自分の中に取り入れられる柔軟さがあったからでした。いじめられるばかりの龍馬が、お母さんの言葉をききかけにみんなと仲良くなり、やがて日本というひとつの

体育館に集まった子どもたちみんなが元気いっぱいにあいさつをしてくださいました。いじめられなかった龍馬が、いじめっこの相談にのってあげたことから二人が仲良くなる場面では、子どもたちも真剣な表情、龍馬がまだおねしょをしていることを打ちあける場面では、クスクスと笑い声も聞こえてきました。紙芝居を読み終えると、「坂本龍馬って誕生日と暗殺された日が同じなで」と、小さな声で友達に龍馬のことを教えてあげることができたり、質問も出たりと、初めての紙芝居は成功をおさめました。

龍馬紙芝居はまだ始まったばかり。この紙芝居がきっかけになって、一人でも多くの高知の子どもたちが、龍馬のことを知り、誇りに思い、龍馬になることを目指して、龍馬紙芝居、これからは本番です!

尾崎 由紀

坂本龍馬検定・上級編スタート

受験期間：平成21年1月15日まで

いよいよ十一月十五日から龍馬検定上級編が始まりました。中級編に合格した猛者が次々と挑戦されており、開始からわずか六日目に早くも合格者が出た。そして八日目には二人目の合格者も現れた。お二人は、埼玉県と山口県の男性である。

この検定の特徴はインターネットで、いつでもどこからでも何度でも受けられる、ということだ。しかも一〇五〇円と比較的安い金額で受けられる。したがって、複数回受験される方が多く、間違った問題や疑問に思った問題を調べて再チャレンジできる。そのため、初級編・中級編でも比較的難しい問題構成となっていた。その上級編なので、さらに難しい内容のはずだったのだが、さすが龍馬ファンは侮れない。いや、もうこのお二人は「龍馬ファン」という域を超えて、「龍馬博士」とでも呼ばなければいけないだろう。

実は、当初の予定では上級編の受験回数を二回に制限する予定だった。その理由は、上級編の合格者（九〇点以上）には、当館への生入館無料、満点者には、高知への研修旅行ご招待などの特典を設けているため、簡単に合格や満点が出ては困るからだ。

しかし、完成した問題を見て、この問題なら簡単に合格者は出ないのではないかと思いきや、二ヶ月間限定で何度でも受験可能に変更した。案の定スタート直後は、二〇点台から三〇点台が多かった。上級編では解答・解説を表示できないため、受験者が納得のいかないケースが出ることを懸念して、二日目から、実際に使用した参考文献をすべて表示することにした。中には、現地に行かなければ分からない問題もあるので、そういう問題については足を運んでいただく以外方法は無い。

合格点を取ったお二人は、やはり図書館へ通い詰めたそうで、「さすが」としか言いようがない。私は大学時代、研究を始めるに当たって、最初に習ったのが、図書館の利用の仕方だった。図書館をフル活用することは意外に難しいが、お二人はそれができる方だろう。正に「知識普及大使（SK大使）」の称号を贈るに相応しいお二人だ。この原稿を書いている今、上級編八八点の方が新たに登場した。この方も中級編「発合格の猛者」なので、上級編合格も時間の問題だろう。

上級編は二月十五日までの受験期間だが、四月にはまた改めてスタートする。まだまだ「龍馬博士」レベルの方はいらっしやるはずなので、挑戦をお待ちしている。

三浦 夏樹

拜啓 龍馬 殿



96通

私は高知県生まれですが、今は宮崎に住んでいます。宮崎で「高知生まれ」と言っていると「坂本龍馬さんの」と言われます。あなたのことを好きな人が宮崎県にもたくさんいます。私はあなたのように大きな心を持ってませんが、同じ高知県に生まれた者として、少しでも人のため、世のためになることをしたいと思っています。今日は青い澄みきった空で、あなたの心のようでしたよ。また宮崎で頑張ります。
 (9月22日 宮崎 K・N 58歳 女性)

私は今、ストリートライヴをしながら、日本一周をしている最中です。あと四分の一で終わります。今回、生まれて初めて高知県に来ました。あなたのように有名になるとは思わないけれど、音楽を通して、日本をもっと豊かな気持ちになれる国にしたいと思っています。私の武器は楽器です。楽器を武器に戦っています。それではまた会う日まで。
 (9月24日 埼玉 Y・T 25歳 女性)

高知に生まれながら、知らないことがたくさんあった。幕末の熱い空気がとても心地良い空間です。
 (10月2日 高知 M・A 43歳 男性)

夕べ、かるぽーしで「龍馬」というミュージカルを観てきましたよ。男前の俳優さんが龍馬役でした。よかったですねえ。昨年年のNHK大河ドラマは「龍馬伝」です。龍馬役をやるのは木村拓哉か、福山雅治かみたいな注目されています。いすれにしても男前ばかりです。今日は龍馬さんの目の高さまで櫓が上がって太平洋を見てきました。もうすぐ龍馬祭りもあります。龍馬さんは今の時代、みんなに愛されています。まさかそんなことになるとは思いません。よかったですよ。おめでとう。
 (11月2日 香川 M・S 35歳 女性)

また来ましたよ。今年はなんと、3月に来て、今日は2回目。何回来てても毎回楽しい。ずっと一緒に来ていた子供たちは長いこと来てないけど、かわりに夫婦で会いに来てますよ。今年は近い人たちの別れや、私の災難など、辛いことが続きました。龍馬も志半ばで逝ってしまい、無念なことだったと思います。自分が感じることで、人のことも分かる。今さらながら涙が出てきます。自分の力ではどうにもならないことってあるんですね。あるがままを受け入れて過ごすことにします。「ほいたら待ちゆうき龍馬」として手にすることができました。

9月21日～12月20日

分が情けなく、人間の棚卸をする思いで桂浜の地をやってきました。これまで、会社をやめたり、失恋したり、上司に裏切られたり、失態のような苦しい節目に、過去3度ここに来て、水平線を眺めてポーツとしていました。でも龍馬殿、あなたの情熱、行動力、正義感に比べれば、私など露ほらいにもなりません。この地で今日も勇気をいただきました。明日からまた少し頑張ろうです。不承くても、正しいと思うことをやり抜きます。
 (10月8日 岡山 無記名 48歳)

昨日、松山の坂の上の雲ミュージアムに行ってきた。秋山兄弟、子規らの「志」を知りました。龍馬の「志」はやはり人として持たなければいけない。「志」ではないでしょうか。世の中を憂いて何も変わりません。自分自身が「志」を持ち、「志」に従って行動することが大事だと。(10年後の自分にも同じことが言える自分)
 (10月13日 高知 T・M 46歳 男性)

「この日本 救ってくれてありがとう」
 (10月13日 無記名)

館内に残されているお手紙を読みながら、涙があふれて止められませんでした。命をかけて今の日本をお作りいただいた息子にも送ってやります。
 (11月2日 M・Y 58歳 女性)

今年もあなたに会いに来ました。今回は去年お腹にいたチビも一緒です。あなたに誓った通り、我がファミリーは愛と笑いにあふれる日々を過ごしています。小さいチビだったのに、ありえないほどの幸せをさずかりました。更なるパワーアップを目指します。人として、母として、自分が自分らしくいれるように。いつもパワーをありがとう。また会いに来るから！大好きだ！
 (11月2日 埼玉 S・U 25歳 女性)

龍馬さんにあこがれて土佐に来ました。家に「おーい龍馬」の本が全巻そろっていていつも読んでいます。ぼくのみよじも坂本といえます。龍馬さんは昔大働きをしましたね。ぼくもそんな大働きをしたいと思っています。
 (11月4日 大阪 K・S 10歳 男子)

年をとるにしたがって、坂本龍馬という一人の男が成し遂げた仕事の大きさに頭が下がります。私も偶然、11月15日生まれます。大きく生きたいものです。
 (11月9日 愛媛 E・K 55歳 男性)

こんにちは、私はあなたに会いたくて、生まれて初めて飛行機に乗り、生まれて初めて一人旅に高知へ来ました。坂本龍馬に出会ってまだ半年くらいなのに、こんなにもあなたにのめりこんでいるなんて、当時あなたに会った人は、もっとあなたを好きになり、ついていきたいと思います。私はいくらでもあなたと会いたいです。

た龍馬様に魂がふるえました。書きながら、涙で字がにじみます。頓首。という言葉が分からず、二階受付でお聞きした私に、とても丁寧にご教壇くださいました。ここにも真心があふれ、その場所に龍馬様が永遠の命をあずけておられることに、また涙があふれました。たくさんの感動をありがとうございます。
 (10月25日 島根 K・S 52歳 女性)

あなたに会いにやってきました桂浜。とても景色のきれいな、心落ち着く場所ですね。昨夜父母と桂浜往へ泊まり、記念館を今日訪れています。歴史全般に興味を持ち、大変詳しい父親が特に好きな薩長同盟の頃の時代。歴史の立役者であるあなたへのルーツを新たに知ることができた、私も桂浜へ来て良かったと思っております。あなたに会えて本当に良かったです。両親の笑顔に連れ、歴史に触れ、すばらしい経験が改めてできたことに感謝！
 (10月25日 福岡 S・K 29歳 女性)

はじめて四国に来ました。私は龍馬が何をした人かよく分かりませんでした。主人は歴史にとりまっせんでした。時間をかけて見たいです。しかし、待っている間に「ほいたら待ちゆうき龍馬」を読んで、すごい人だったんだなあと。今から龍馬のことを知りたくなりました。
 (11月1日 福岡 Y・N 38歳 女性)

人生の縁とは実に面白いものですね。私は今、愛媛県東温市にある坊っちゃん劇場という場所で、役者、という仕事をしています。元々、愛媛出身で、役者を志し愛媛を離れ、再び今、愛

*** 編集者より ***

明けましておめでとうございます。これは毎回のことなのですが、このページに掲載するメッセージ並びに苦労しています。どれも心に響くものばかりで、本当は「飛騰」を全部「拜啓龍馬殿」のコーナーにして欲しいほど。このコーナーを担当して4年、その間に寄せられたメッセージはすべて読ませていただいています。龍馬への手紙を読んでいると、受付では「すました」顔をしていた方が、実は、龍馬に対してこんなにも熱い想いを抱いていることに驚かされます。その熱い想いがあるからこそ、全国各地から、遠路はるばる高知・桂浜までお越しにいただいているのです。本当にありがとうございます。それでは、本年も坂本龍馬記念館をよろしく願っています。ほいたら待ちゆうきね。
 尾崎 由紀

こうやって自由に旅もできなくなる。でもあなたのように、常に広い世界を見続けるからね。
 (11月14日 埼玉 K・U 21歳 男性)

八重樹さんの日々

心密かに楽しみにしていることがある。八重樹さんとの約束である。八重樹さんは、昨年10月から11月にかけて館の「海の見える・きやらい」で企画展を行った洋画家であり挿絵画家でもある吉松八重樹さんのことだ。「吉松さん」と姓で呼ばず「八重樹さん」と名で呼ぶのは皆さんそう呼ぶし、また、お会いしてそれがお似合いとすぐに分かった。

八重樹さんは地元、浦戸の出身の東京住まい。もう、いやまだ82歳。ただし帰郷は実に30年ぶりという。帰郷のきっかけは色々あったらしいが、要は地元の人八重樹さんも皆が「会いたくなった」気持ちの結果だ。出合いの達人龍馬の館で、八重樹さんの「故郷とのであい展」である。開催決定と同時に50枚の洋画と、挿絵がぎっしり入った段ボール箱が9箱も届いた。絵を見ただけで、蘇ってくる少年時代があった。その絵を通してその時代が見えた。思い出もある。

よろめくように入って来られたお年寄りだが、八重樹さんとぶち当たるように衝突し、ひしと抱き合った。顔はくしゃくしゃ。見詰め合って抱き合って、また見詰め合う。涙ポロポロ……。企画展初日の八重樹さんはそれで「日が終わった。2日目の挨拶は「昨日あんまり涙が出て、体重が軽くなりました。もう今日の分が残っていません。でも、友達、故郷はいいですねえ」言いながらも声詰まらせる。

ここは館長の部屋 森 健志郎

「美の探究の中で、テクニクだけに走るのでなく、人間としての学びを重視したい」八重樹さんは絵を描く心をそんな風に話した。「人生最後に龍馬を描きますから」帰京前日、送別会の席で隣り合わせた八重樹さんは眼鏡を光らせた。生き生きとした表情に、構想はまとまっていると感じた。館では1月いっぱい今度は、挿絵だけの展示企画を計画している。「八重樹・挿絵の世界展」(仮)である。



「ほいたら同窓会」開催

十一月一日、「ほいたら待ちゆうき龍馬」取材、掲載された方が桂浜に集合しました。名づけて「ほいたら同窓会」。

参加者の感想 ★すげえ、龍馬は偉大だ。何十年も百年たっても人の心を奮い立たせる。それをもっと身に感じたいのが今回高知に来るきっかけとなった1冊の本。「ほいたら待ちゆうき龍馬」

この本に参加させていただくことになり参加して下さる方が集まる同窓会。夜集まったのは龍馬を通じて知り合ったばかり。今回来た方も来れなかった方も思いは一緒。いろいろな年代でいろいろな地域の人。いろいろな思いを龍馬が繋いでくれた。やっぱり龍馬は偉大だ。

埼玉県熊谷市・上野静香 ★どうせなら高知公演を！と学校行事のなかった十一月八日に「龍馬」を観て来ました。好天に恵まれ前日に「島抜け」しました。何回目かの高知ですが、三翠園でゆっくり湯に浸かり、カツオのタタキにワッポの唐揚げ、お酒、もちろん企画展もじっくり、満足でした。で、ミュージカル、そりやもう楽しかった！龍馬も人生楽しんだんだらうな、とろくろで思っ...

大阪府茨木市・峯尚志 ★四年前に初めて記念館に訪れた時に「龍馬は今も生きています」と感じ、この度久しぶりの龍馬との再会では「龍馬は今も成長している」と新たに教わった気がいたしました。龍馬と肩を並べて水平線の果てを眺めた感激は言葉にならず、ただ心洗われ、明日への力を授かった思いでした。大きくなった子ども達も、前回以上に心に残ったことと思います。龍馬を育んだ高知でのひと時に感謝し、「また来たいわね」と言いながら帰路につきましました。

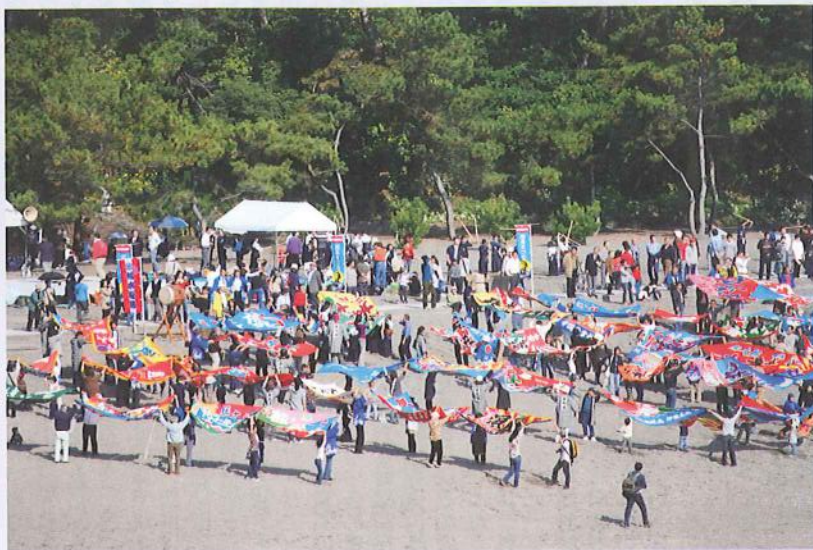


龍馬を呼ぼう!人と大漁旗のパフォーマンス みんなの思いが一つに結集

「おーい、龍馬」「龍馬、最高!」太鼓の音と共に人々の声が桂浜に響き渡りました。11月16日(日)桂浜で行われた“龍馬まつり”に桂浜再生促進協議会も参加をしました。地元の皆さんはもちろん、観光客・一般の方々にご協力いただいて大漁旗と人で“RYOMA”という文字を本浜に描くパフォーマンスを行いました。4月20日「桂浜龍宮祭」で行った大漁旗を使ってのパフォーマンス第2弾です。100枚もの大漁旗がいっせいに波打ち、快晴の空の下に翻りました。前々日からリハーサルと準備を進め、天気を祈りながら当日の朝を迎えました。浜では協議会のメンバーが用意したチラシ寿司、てんぷら、龍馬汁が飛ぶように売れ、「ほんとに美味しい!」と午前中あっという間に300食が完売となりました。

「地域ぐるみ」で何かを発信しようという会の思いも、着実に形となって前進しています。さて、次回の「桂浜龍宮祭」では何が飛び出すか、今から楽しみにしてください。

中村 昌代



肖像画寄贈の山脇さんに感謝状

龍馬をめぐる幕末の人々の肖像を描いてきた肖像画家、山脇昭一さん＝高知市＝が、このほど肖像画8枚と龍馬の写真1枚を、龍馬記念館に資料として寄贈、山脇さんに同記念館から感謝状が贈られた。

森館長から感謝状を受け取る山脇さん(記念館で)



寄贈された作品は、勝海舟、西郷隆盛、中岡慎太郎、武市半平太、お龍、河田小龍らなじみの顔ぶれ。ただ、山脇さんの作品は写真にはない独特の雰囲気、存在感がある。企画展では折に触れて展示して好評だ。山脇さんは「時間が出来たら龍馬に挑戦したい」と熱意を燃やしていた。

森 健志郎

「坂本龍馬銅像傘寿を祝す讃歌」展

11月15日より高知歌人の会と現代短歌を考える会の主催で「坂本龍馬銅像傘寿を祝う色紙展」を開催しました。去る7月に桂浜の龍馬像建造80年を祝し詠まれた



歌の中から約70点、龍馬を偲んだそれぞれの思いが短歌として色紙になりました。初日は「龍馬祭」の当日でもあり近江屋の前では村山保氏らの詩吟も披露され、龍馬に対する並々ならぬ気持ちが表現されていました。来館者にも、静かに熱く伝わってきた気がします。

中村 昌代

「龍馬も歩いた桂浜に響く大正琴の演奏会」

11月15日は龍馬の誕生祭。当記念館“近江屋”でも“琴城流大正琴桂浜教室”の浦戸・みませグループの方たち総勢40名によって、“大正琴と唄、踊り”の演奏会が賑やかに行われました。「幸せのワルツ」「南国土佐を後にして」などあたたかい大正琴の音色に「よさこい鳴子踊り」のシャキとした鳴子と踊りそして力強い歌声が加わり近江屋はまさに祭りの雰囲気でした。大勢の来館者の皆さんも周りを囲み、笑顔こぼれる1日でした。

中村 昌代



入館状況

2008年12月20日現在(開館以来6,201日)	
◆総入館者数	2,224,393人
◆2008年度最多入館 5月4日	2,321人
2008年度最少入館 12月17日	66人
2008年度1日平均入館者数	397人
◇最多入館 1993.5.3	3,700人
◇最少入館 2004.10.20(台風のため)	8人

編集後記

今回も載せたい記事があふれてしまった。いくつか次号へ持ち越すことになった。それだけ記念館の話題が多くなっているということだろう。もうここには書きたいと思ったがやっぱり触れねばならない。NHKの大河ドラマ「龍馬伝」である。「よろしゅう頼むぜよ」そんな龍馬の声に、背中を押されての新年となった。今年も宜しくお願いいたします。(モ)

館だより「飛騰」第68号(年4回発行) 表紙題字:書家 沢田 明子氏
 〒781-0262 高知市浦戸城山830
 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
 http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
 入館料 一般500円・高校生以下無料
 (特別企画展料金のため)

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください